

東日本大震災に遭遇して その5 心の復興と震災の記憶・教訓を伝える活動

1. 東日本大震災の記憶と教訓を伝えたい

東日本大震災では多くの尊い命や財産が奪われた。さらに原発事故という未曾有の事態が発生し、その影響が今なお東北全体に及んでいる。すぐさま避難さえすれば2万人近くもの人が命を落とすことはなかったはずである。震災後多くの人々から生き残った体験談をお聞きするにつけ、未だに悔しい思いがする。甚大な犠牲の中から得られた貴重な教訓を後世に伝えていくことは、現在を生きる我々の使命であるという思いを深くしている。

私は、震源地に最も近い島・金華山で東日本大震災に遭遇し、建物崩壊の危機、崖崩れの中の高台避難、さらには高台にまで押し寄せた巨大津波から逃れて三度命拾いをした。この時、目に見えない大きな力によって生かされたような気がした。この「生かされた命」を被災者や復興のため役立てようと考え、それ以後ボランティアや犠牲者追悼のために頻りに被災地を訪れている。そのたびに、身内や知人を亡くした人々が身近な場所に「祈りの場・心癒される場」を望んでいることを実感させられている。鮎川の避難所にいた時、母親と幼い女の子が何も無い浜で、1本の花を砂の上に丁寧に横たえ、ひたすら祈る姿を見た。その時流した大粒の涙は忘れることができない。祈りの場を望んでいるのは、津波被災地のみではない。内陸部や秋田県・山形県の人々も、近くに慰霊の場があればぜひ祈りたいと望んでおり、いろいろな自然災害で亡くなった方々も含めた慰霊の場を望む声もあった。また、東北以外から訪れた多くの観光客に質問したところ、たくさんの人が集まる有名な場所や寺院にこそ慰霊の場が必要であると答えた。祈ることという行為と災害を伝えるメモリアルモニュメントを通して、災害の記憶や教訓を伝えることは非常に有効だと考えている。

私は1995年の阪神・淡路大震災から間もない頃に四国遍路をした。その時、大震災で身内を亡くした方々が多数遍路に来ていた。その人々は供養もさることながら、むしろ自らの心の痛みを癒すためにやってきたと言う。東日本大震災1年後、私は小学4年の孫と一緒に東日本大震災犠牲者追悼と復興祈念の四国歩き遍路をした。その折、孫や多くの人々に震災の様子や教訓を心を込めて話した。孫は遍路5日目に、犠牲になった方々を悼むことで心がとても癒されたと語った。私はその言葉を聞いて非常にうれしかった。強く説得して連れて来た甲斐があったと感じた。四国の人を始め多くの方々から「東北に追悼の場をぜひ作ってあげてください」と強い励ましを受けた。震災2年後、高野山奥の院に「東日本大震災物故者慰霊碑」が建立されたので、さっそくお参りさせていただいた。その前に立った瞬間、心身ともに引き締め、被災地からこんなに遠方に立派な慰霊塔を立ててくれたことに深い感謝の念を覚えた。何人もの人たちがそれに向かって真剣に手

を合わせ、読経している。その声に思わず体が震えた。読経の声を聞いて感動したのは生まれて初めてだった。東北各地に東日本大震災の祈りの場を創設する意志がさらに固まったのはその瞬間であった。さっそく単独で行動を開始した。それは、2013年9月1日、まさに満70歳の誕生日であった。その時の熱い思いと決意を吐露した詩的散文を紹介したい。

2. 凜とした背中

私の背中はいま どこか変化しているにちがいない
古希を迎え 人生の集大成として
とてつもなく大きいことに取り組みにはじめた
東北六県に「東日本大震災への祈り」の道を創ることだ
私は 震源地に最も近い島・金華山で大震災に遭遇した
建物崩壊の危機 がけ崩れ最中の津波避難 さらに巨大津波の高台襲撃を受けながら
3度も命拾いした
天からか 大自然からか それはわからない
何か大きな存在によって生かされたような気がした
「人のために役立て！」と ドンと背中を押された思いがした
だから被災地に足しげく出向いた
被災地の人々は手を合わせる場所がほしいと言う
亡くなった身内や知人を悼み
自分自身も癒される祈りの場があるといいなと語る
被災地以外の人びとも
犠牲になられた方々に祈りをささげに行きたいという
そんな願いに応えたいと思った
震災1年後には 小学4年の孫と二人で四国八十八ヶ所を歩いて
東日本大震災犠牲者追悼の旅をした
そんな経験から 東北に東日本大震災犠牲者追悼のための巡礼地がほしいと思った
これを創ることこそが自分に課せられた使命だと強く思った
多くの人々に苦しみを与え 不安を抱かせ続ける放射能
これらの記憶や犠牲の中から生まれた貴重な教訓を
後世に伝えなければならないと 強く思った
今までの人生は これをやり遂げるための基礎作りだったように思える
この歳になって自分の背中に 今までとは一味違った
凜とした人生模様が描き加えられたような気がする

早速、この趣旨に賛同する有志たちに声をかけて「みちのく巡礼創設実行委員会」を立ち上げた。

目的は、「東日本大震災等の災害で犠牲になられた方々を悼むとともに、祈ることで自らも癒され、災害の記憶や教訓を胸に刻むことができるような祈りの場を創設する」ことである。

2014年1月には、社会的責任と貢献を果たすことができる見通しが立ったので法人化に踏み切った。現在、非営利型「一般社団法人みちのく巡礼」として活動を継続している。

3. 活動目的および概要

3.1 活動目的

- (1) 東日本大震災等の犠牲者を慰霊するとともに、自らの心も癒される祈りの場、心の拠り所を提供する。
- (2) 大震災等の記憶や教訓を伝承する。
- (3) 災害時における心構えと適切な対処法を教育する。

3.2 実施概要

当法人をコーディネーターとし、寺院、地域、会員が協力しながら次のような活動を継続していきたいと考えている。

(1) 東日本大震災等犠牲者慰霊の場創設

慰霊の場、および大震災の記憶や教訓を後世に語り継ぐ碑や説明板などを寺院に設置する。

(2) みちのく巡礼の紹介と被災地巡礼ツアー

まず、より多くの人々に足を運んでもらうことが重要である。その実現のためにインターネット、パンフレット、地図、ガイドブックなどで紹介するとともに、被災地巡礼ツアーを実施する。

(3) 震災の記憶や教訓の伝承

体験談の語りや朗読、映像や音声、本、紙芝居などによる伝承。

(4) 防災および命を守る教育

公共施設、慰霊の場となった寺院などを会場として、「防災と命を守る」をテーマとした講演会、講習会、シンポジウム、およびイベントを開催する。

(5) 全国の自然災害犠牲者の慰霊の場としての役割

みちのく巡礼の祈りの場は、今後発生することが予測されている東海地震、東南海地震、南海地震、これらが連動した連動型巨大地震および首都直下型地震、さらには異常気象が原因とされる様々な自然災害で命を落とされた方々を慰霊し、同時に悼む人々の心をも癒す場でありたいと考えている。

(6) 相互交流の促進による災害時の連携

地域・寺院・会員間の相互のつながりを促進するための支援を行う。年間4回の会誌の発行、巡礼地となった寺院の紹介、寺院や近隣地域を拠点とした行事などを継続実施す

る。交流を促進させることによって、災害時に寺院が救援センターや避難所としての役割を果たすような支援をしてゆきたい。

(7)復興と巡礼文化創出

将来は、慰霊の場を結ぶことで巡礼の道が出来、巡礼の道を発展させることで、東北に四国遍路のような文化や永続的な地域文化を生み出すことを目指している。そこを拠点に、震災被災地の心の復興や東北地方の活性化につながるような活動を継続していく。中年や若い方々の活動参加を心よりお待ちしております。

(8)東京オリンピックに向けて

2020年の東京オリンピックの際には、多くの外国の方々が観光も兼ねて東日本大震災犠牲者追悼のために訪れていただけることを切に願っている。東北を世界に知っていただくよい機会になり、震災のさらなる復興と東北の発展につながるに違いない。これにふさわしいシステム作りに邁進してゆきたい。